

## コリント第一1章18節 「十字架のことば」

### 1A 「十字架」の愚かさ

#### 1B 恥辱と屈辱の象徴

#### 2B コリント文化

##### 1C ローマ植民都市

##### 2C 上昇気質

##### 3C ギリシア人の語り口

### 2A 愚かなことば

#### 1B ユダヤ人にとってのつまずき

#### 2B ギリシア人にとっての愚かさ

#### 3B 滅びる者

### 3A 救われる者の神の力

## 本文

コリント人への手紙第一1章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、今日から、コリント第一に入ります。午後に一節ずつ見ていきますが、今朝は1章8節に注目します。「**十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。**」私たちは、十字架につけられたキリストについて、ローマ人への手紙でもじっくり学びました。この方の十字架の死によって、神の律法が完成して、信じる者すべてを、罪と死と裁きから私たちを救う力を持っていることを見ました。コリント人への手紙では、そのことばが、自分たちの生きている文化や社会の中でどうしても、その意味するところが薄れてしまう、という問題について取り扱っていきます。

### 1A 「十字架」の愚かさ

#### 1B 恥辱と屈辱の象徴

私たちは、十字架のことばの衝撃を受け止めることができません。そして文化的に、十字架というものが飾りのようなものになってしまっているのです。ネックレスになったり、ウェディングの建物にある飾りのように見られるでしょう。けれども、ある注解書に、その著者が、こんなたとえをしてくれました。「今日、職場に、いつも働いている仲間の女性が、原爆のきのこ雲を象ったイヤリングをしてやってきたらどう思いますか？また、教会の壁画で、ユダヤ人の大虐殺、ホロコーストで、アウシュウィッツの強制収容所にある大量の死体が描かれていたらどう思いますか？<sup>1</sup>私たちは、十字架といたら、イヤリング、教会の飾りのように考えてしまっていますが、当

---

<sup>1</sup> Carson, D. A. (2004). [The Cross and Christian Ministry: Leadership Lessons from 1 Corinthians](#) (p. 12). Grand Rapids, MI: Baker Books.

時のローマ社会に来ている人々にとっては、今のような例えのような衝撃を持ちます。

いわば、社会悪だけれども、見たくもない光景、想像したくもない光景です。ローマ市民には、決して十字架刑にしませんでした。あまりにもむごい処刑方法だからです。奴隷、非ローマ市民、野蠻人が磔にされるものであり、反逆者や殺人者のような凶悪犯だけがかかるものです。もし、私たちが小菅にある東京拘置所で、首つりによる死刑の光景を見せられたら、たまったものではないですね。死刑制度については是非がありますが、たとえ是認する人であっても、その光景を見たら、頭から離れず、心的外傷を受けるかもしれません。それでも、絞首刑はまだ人道的です。十字架刑は、想像を絶する残酷さです。残酷なだけでなく、ひどい辱めです。裸にされて十字架にかけられます。大衆が見られるように、大きな道のそばで十字架につけます。雑踏の中で、大衆とも話ることができるほど、近距離です。自尊心や面子のようなものは、根こそぎはぎ取られます。こうした、反吐が出そうな光景であり、それを人々の口にするのさえためらうものだったのです。

しかし、パウロは、「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。(1:23)」と言ったのです。

## 2B コリント文化

パウロが、ここまで語気を強くして話したのでしょうか？理由があります。コリントにある教会は、パウロがやってそこで教え、そして建て上げられましたが、後から来た教師たちの影響で、全体的にパウロに反発するようになりました。けれども、それはパウロを否定するだけでなく、パウロの宣べ伝えている福音からも離れてしまうこととなります。キリスト中心、福音中心ではなく、世において、周りの文化や社会で受け入れられている話しが中心になってしまったのです。

これはキリスト者が、生まれつき持っていた性質である肉の問題です。パウロが 3 章 1 節で、「私はあなたがたに、御霊に属する人に対するように語るができずに、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。」と言いました。肉に属するキリスト者、キリストにある幼子とはどういう人なのでしょう？それは、自分の思っていること、していることは、キリスト者としての考えなのだ自分自身は思っているのですが、実はこの世の考えや思いと混じってしまっている、ということです。キリストについては語っているのかもしれませんが、実は、世のただの人と同じことを言っていたり、行っているにしか過ぎません。

キリストの教えを中途半端に聞いて、それで自分の文化の中にいまだ生きてると、どんな混乱が起こるかを説明したいのですが、極端な例を挙げましょう。宣教師が、未開の地で、酋長を信仰へ導きました。彼には複数の妻がいました。宣教師は、テモテ第一 3 章を見せながら、一人の妻であることがふさわしいことを話しました。しばらくして、酋長に会いました。奥さんは一人しかいませんでした。それは良かったのですが、「他の人たちはどうなったのですか？」と尋ねると、「すべ

て食べました。」と答えました！食人文化があって、キリストの教えを守ろうとしたけれども、区別がついていなかったのです。

### 1C ローマ植民都市

そこで、背景にある文化や社会を知っていきたいと思います。コリントという町は、わずかに陸地がつながっているけれども、エーゲ海とアドリア海の間にある、地峡と呼ばれるところにありました。船は、半島の周りを航行するよりも、そこで荷物を卸して、そして向こう岸まで陸路で運び、それから再び積荷するほうがずっと安全でした。それで、コリントの町は大きな貿易中継都市となりました。また、町には大きな山があり、そこが自然の要害、アクロポリスにもなりました。その頂上の付近には、ギリシアの神々を祭る宮の跡があります。そして、それにまつわる淫乱も蔓延していました。

紀元前五世紀頃、ギリシアの都市国家として栄えました。そしてずっと後に、ローマのモデル都市である、ローマの植民都市になりました。そして大いに栄えます。いろいろな人が住み、いろいろな人が行き交います。自由を求めて多くの人々がやってきました。いわば、今日の大都市、東京みたいなものです。地方出身の人たちがどれだけいるでしょうか。村社会から脱皮したいと思って、いろいろな可能性を求めてやってきましたね。

### 2C 上昇気質

その中で、自分がいかに金持ちになるかを考えていました。上昇気質が強くありました。それで、経済的に豊かで、家の出自がよく、文化的にも洗練されているような影響力のある人々に、関係を持つと人々は求めます。街で歩いている女の子が、スカウトされて、良いマネージャーが見つかったら、人気アイドルになれますね。そのように、影響力のある人につながることによって、自分の地位を高めようとするのです。自己実現欲求の非常に強い社会でした。周囲のしがらみがないので、その自由の中で自分を高めたい、だれか影響力のある人につきたいと願うわけです。

そして、このように上昇傾向の強い人々の間で、同じような境遇の人々と横につながることも盛んでした。どこかの輪に入って、仲良しグループを作って、その中で贈り物を送ったり、もらったりします。そうやって、ネットワーク作りにも熱心なのです。こちらも、自分の居場所を探すために、東京など大都市文化では、熱心に行ったりしますね。

こうしたことが、ローマ支配下のコリント文化に強くあったのですが、彼らが信仰をもって救われたものの、分裂が起こったのです。キリストに根ざすことによって私たちは霊的に成長します。けれども、影響力のある人々に付いてしまったのです。私はパウロに付く、と言い、ある人はアポロにつく、ある人はケファつまりペテロに、またある人はキリストにつく、と言ったのです。全く無意味なことで、すべてがキリストのしもべであり、自分に仕える人々であり、キリストにあって建て上げられることが目的です。でも、私はパウロ派、アポロ派、ペテロ派とか、派閥を作って行ったのです。

こうしたことは、現実によく起こる問題ですね。すべてがキリストの教会なのに、この教会の賛美が魅力的ではない、こちらは優れているとか、あの教会は交わりがいい、でも牧師の説教はうまくないとか、この教会が正しくて、他の教会は真理から妥協しているとか、無意味なところで比較したりするのは。また、サークルのようにしてグループを作っていく、仲間意識を強め、分派的になり、自己中心的になっていくのです。

### 3C ギリシア人の語り口

そして、コリントの町には、ローマ時代の前のギリシア文化が色濃くありました。ギリシア文化とは、哲学者のような知恵です。すべてのことを一つの体系によってすべて説明できるようにすることを、知恵だとします。今日にもありますね。共産主義は、すべてのことを階級の闘争のようにして説明します。けれども、キリスト教会だってありますね。ある神学体系を学んで、これで世界のすべてが分かった！という思いにさせるのです。

そしてギリシア人は、雄弁に語る論客が尊ばれました。内容よりも、その語り口が尊ばれたのです。その論客がいかに説得力のある言葉を使っているかが大事で、内容がどうなのかはあまり問われません。そのために、非常に表面的なところで、「この説教者はよくない」「あの説教者のほうが、すごくいいよ」とか言って、批評していたのです。これもまた、本当に今の教会の問題ですね。あまりにもたくさんの説教が、ユーチューブなどで聞くことができますが、実際に、教会に行かずにネットだけで説教を聞いて、比較している人々がいます。でも、自分の心に突き刺さる、肉を十字架につけるような神の声を聞いていたら、そんな比較する暇などありません。

ですから、肉的な教会文化といたらよいでしょうか？教会は御霊の住まわれるところであるはずが、世の中と変わらないことが起こっているのです。彼らは、確かに信仰によって救われていました。神の前には聖別されています。イエス様が再臨した時にまみえることができます。けれども、実際の場面において、まだまだ世の動きと同じことをしているのです。そこで、パウロがそれぞれの問題を、福音の真理に照らして、彼らの何が誤っているのかを明らかにして正しています。それが、コリント第一の大きな流れです。

### 2A 愚かなことば

そして本文に戻りますと、パウロが、コリントの人たちが、知恵と呼ばれているものに囚われていることに気づきました。ギリシア人の哲学者のような知恵です。また、どのような語り口で語っているのか、雄弁なのかどうかに関心の的になっていることに気づいていました。それでパウロは敢えて、そうしたことばの知恵に頼らず、敢えて「十字架につけられたキリスト」を宣べ伝えたのです。

彼らは、パウロにつく、アポロにつく、ペテロにつく、とか言っていましたが、人々は当時、社会を民族や社会階級に分けていました。「ユダヤ人とギリシア人」「自由人と奴隷」「男と女」というよう

に、人々を分類し、相対しているようにみなしていました。ユダヤ人がギリシア人か？自由人なのか、奴隷なのか？私たちも、ともするとそのような思考に陥りますね。この人はどちらに当てはまるのだろうか？支持者なのか、反対者なのか？など。しかし、福音の前ではそんなことは、どうでもいいことなのです。パウロは、はっきりと二種類の人たちしかいないことを述べています。「**滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力**」滅びる者と救われる者の二種類しかいないのです。それを分けているのが、十字架のことばです。

### 1B ユダヤ人にとってのつまずき

パウロは、社会の中にある大きな二つのグループ、ユダヤ人とギリシア人を取り上げて、次のように説明しています。「1:22-24 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、24 ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。」

ユダヤ人とギリシア人は、求めているものが違います。まず、ユダヤ人ですが、「しるしを要求」しました。それで、キリスト、彼らのメシアが十字架につけられて、つまずきました。彼らにとってのメシアは、力をもって正義と平和で支配し、異邦人の国々を治めてくださる方です。「アモ9:11-12 その日、わたしは倒れているダビデの仮庵を起こす。その破れを繕い、その廃墟を起こし、昔の日のようにこれを建て直す。12 これは、エドムの残りの者とわたしの名で呼ばれるすべての国々を、彼らが所有するためだ。——これを行う【主】のことば。」このアモスの預言では、倒れているダビデの仮庵、すなわちユダヤ人たちを神は立ち上がらせて下さり、イスラエルの国を建ててくださる。そして、エドム人など異邦人たちをユダヤ人たちが所有するようになる、ということです。

このような力強い方であるのですが、彼らの中で、「自分たちの便益のために、何でもやってくれる力強い味方」のようになってしまっていました。イエス様が五千人のパンの奇跡を行われたら、彼らはイエス様を担ぎ上げて、自分たちの王にしようとしたが、イエス様は退かれました。その後も追っかけをしていたのですが、イエス様ははっきりと、「ヨハネ 6:26 あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。」自分たちがたった今、自分たちが欲しているものをくれる存在になってしまっていたのです。

それで、イエス様がエルサレムに向かわれた時に、彼らの中には、そのまま力をもってローマを打ち倒し、神の国を立ててくれると願っていました。ところが、ローマ反逆罪に問われて、最も屈辱に満ちた十字架刑に処せられます。メシアが、こんな仕打ちにあっていいものか！ということで、つまずいてしまうのです。このように、自分の思い通りにならないと、彼はメシアではないとしてしまいます。そこには心の中で何でも自分の思い通りになってほしいという自己中心性がありますね。神でさえも自分の思い通りになる、という偶像です。私たちが、祈りを献げても、聞かれないからこ

の神は信じないとしたら、それは、しるしを要求していることになります。

## 2B ギリシア人にとっての愚かさ

次にギリシア人ですが、「知恵」が彼らの欲望になっていました。先ほど話しましたように、すべてを説明できる体系を求めます。けれども、世の中そんな単純に動いていませんね。白黒はつきりしません。不条理がたくさんあります。けれども、すべてを説明する解答がほしいのです。ここにも偶像があります。すべてを理解したいという欲望、自己中心的な思いです。

その中で福音の真理、キリストの十字架と復活は愚かで仕方がないのです。この世には悪や不条理がいくらでもあります。その神が介在しているなんて、信じられませんでした。正しく、慈悲深い神がいるならば、どうしてそんなことが起こっているのか？分からないのです。だから、ギリシア人は神々として、自己中心的な神々を信じていました。人間よりも人間臭い、自己中心的な神々がギリシア神話に登場します。あるいは、神がいたとしても遠くにいて、人間のことには、この地上のことには全く関わらないとも考えたのでしょう。地上には不条理があるので、そういったことに神が関わるとすると、理屈にかなわなかったのです。

けれども、十字架はその不条理の究極の姿です。人に救いを与える救い主が、どうして人々を救う前に、自分自身を救えなかったのか？こんな全く理にかないません。ある美術館に行って、十字架に付けられたキリストの姿の絵画が掲げられていました。若者二人が、「これがキリスト教では救い主っていうんだってよ。」ということで、見下すような言い方をしていたのを、思い出します。おそらく、救い主なら、なんでこんな惨めな姿になっているのか、理にかなわなかったのです。

さらに、復活は、なおさらのこと愚かだと思っていました。死んだらそれで終わりではないか。これは不条理なことだから、そのままにしておけばよいのだ。そもそも、神というものがいるなら、人間の生活のど真ん中に来るはずがない。だから、神が肉体を取られたということを否定しました。ましてや、人間の不条理の究極である死というものに神が関わっているなど、言語道断である、と思ったのでしょう。クリスチャンたちを、不信者の人たちが見て、苦しみの中にあるのに希望があるとか話されると興ざめしますし、人が死んでいるのに、それでも希望があります、復活の希望があるますとか話しますと、くだらない話はほどほどにしてくれないか、と思いますね。同じように、福音のことは、ギリシア人には愚かだったのです。

## 3B 滅びる者

しかし、パウロはどちらも、「**滅びる者たち**」と言っています。どうしてか？自分中心的な思い、心にある偶像については、何の力も持っていないからです。ユダヤ人にとっては、自分の思い通りに神が力強く働いてくれるという自己中心性がありました。ギリシア人には、自分がすべて理解できるように神はすべてを動かさないとはいけなくとする、自己中心性がありました。その自分というも

のこそが問題なのに、そこには目をつぶっているのです。

イエス様が、「わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です。あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」と言われましたが(ヨハネ 8:31-32)、彼らは、自分たちは奴隷ではないと否定しました。するとイエス様は、「罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。」と言われました(8:34)。罪が心の中であって、それを直視していないのでそのまま放置されたまま、罪の中で滅んでしまうのです。罪の根っこは「高ぶり」プライドです。天地を造られた、命の源である神から離れても、自分が生きられるという高ぶりがあります。だから、自分自身を中心にして動かざるを得ないのです。

### **3A 救われる者の神の力**

しかし、「**救われる私たちには神の力です**」と彼は言います。

人が神のかたちに造られています。ところが、初めの人々が罪を犯して、神のかたちが損なわれました。そのため、その子孫もみな、罪と死の支配を受けています。罪を犯した魂は死にます。

そこに、キリストが来られて、罪の支配をご自身が敢えて身代わりに死なれることによって、取り除かれました。ここに愛があります。自分が罪の中で死んでいるところに、神はご自分の御子を犠牲にされたのです。ですから、つまずいたり、愚かだと思ったりする人々がいても、私たち信じる者たちには、この方がとんでもない愛をもって、自分のために死んでくださったことを知り、心が癒されるのです。

そして、動物のいけにえの血では、罪は取り除かれませんが、御子ご自身の罪なきからだ、完全ないけにえで、罪が取り除かれました。神の交わりから、神の命から離れているところからの救いです。罪に対する神の怒りからの救いもあります。また罪の力、死の力からも解放されています。罪に打ち勝つ生活ができ、また死んでもまたよみがえる力が与えられています。

これは、「**神の力です**」。ギリシア人による知恵によれば、それを理解しようとするのですが、そうではありません。理解するかそういうことに関係なく、そのまま作用するのが力です。薬について、その複雑な化学的な配合を知らなくとも、それが効くことを聞いて信じて、それで服用しますと、その通り効きます。同じように、理解ではなく、そのまま信じることによって救われる力を受けます。ビリー・グラハムが東京ドームで説教した時に、ご自身の腕が振るえていないのを見せました。以前は震えていたそうです。パーキンソン病のためです。けれどもお薬を飲んでからは、震えが止まったそうです。

彼の息子、フランクリン・グラハムが日本武道館で説教した時に、何度も何度も同じ言葉を聞き

ました。「神はあなたを愛しています。」そればかり、言っていました。そんなの分かっているさ、もっと面白い話ないの？と思ってもおかしくない、あまりにも単純な話し方です。ところが、何度も聞いていると、自分が神に愛されていることを受け入れていないことに気づきます。どこかで条件をつけて、「自分は良い子にしていれば愛されている」と考えている自分に気づきました。そのまま愛されていると受け入れていないのです。

ここです、知恵のことばではなく、ただ十字架のことばを信じているかどうか？であり、信じれば、神の力が、罪から自分を解放する力が働くのです。そして罪から、自己中心性から離れれば、コリントの人たちが議論しているような、自分がどこについているのかとか、人との比較など、そういったことがいかに幼いこと、大人げないことなのかを知ることになります。